

第16期「教師力養成講座」を終えて 「一人一人の長所を伸ばす支援方法」

受講生氏名：立川 紗良

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

生徒と関わる上で、生徒理解は重要であり、生徒を理解した上で支援やかかわりをしていくことが大事であると考え。その際に、その子の長所を伸ばせる働きかけをして、その生徒の長所をより伸ばすことのできる支援をしたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

一人一人の生徒の良さやもっている力はどのようなものか、その生徒の得意なことを見つけることを意識して関わる。また、指導者がどのような支援をすることで生徒の良さを伸ばしているかに着目して観察し、支援方法の意図やどのようなところを意識されているかを考察したり直接お話を聞いたりしながら実際に、意図のある関わりを行う中で長所を伸ばす支援について考える。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は、高等部の企業就労を目指すコースの3年生を担当し「保健体育」でバスケットボールの授業を行った。女子に焦点をあてたルールを設定することやチームで話し合う場を設けた。その工夫により、チーム全体を見ることが得意な生徒や女子の生徒が輝く場面が増えた。保健体育の授業など得意不得意が分かれることが多い授業でも全員が楽しみ活躍できる設定をすることが大事になることを学んだ。

後期は、医療的ケアを行う生徒を含む重度重複障害のある生徒が在籍する高等部2年生を担当した。「生活単元学習」でルールを守ってゲームに参加したり数に親しんだりすることをねらいとして、お玉リレーに取り組んだ。その際に生徒自身がお玉を持てるようにお玉の持ち手を太くしたり底に滑り止めをつけたりする工夫をした。生徒の力でボールを運ぶことができる支援の工夫をすることが生徒の自信にもつながることを学んだ。またその生徒に合った支援をすることの大切さや身体介助の際に生徒が力を発揮できる支持部分や方法を理解しておくことの大切さも学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

演習を通して、生徒理解をすることの大事さを改めて実感した。そして、生徒の行動を意味付けすることの大切さも学んだ。生徒の少しの動きを指導者が意味付けすることにより「この先生は私の思っていることを分かってくれている」と感じ、信頼関係も生まれることを学んだ。そして生徒は目線の動きや手の動き、発声などのたくさんの表出をしていることを知り、その反応を見逃すことなく言語化することが大切になることを学んだ。また、一人一人の実態を理解し、課題を明らかにした上で、その子のできる力を伸ばすための個に応じた具体的な支援方法や支援のタイミング等を指導者間で共通理解することの重要性を学んだ。生徒に合わせた目標を設定し、目標に向けての支援の方法やどこを支援するかなどを指導者で統一することが大切になることを2つのクラスを通してより理解した。また、日常生活の指導では待つことの重要性も学んだ。生徒の表出を待ち、その生徒の意思を大事にすることにより思いが伝わり実現できた経験を重ね、それが自ら表現する意欲を高めることにつながると学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「特別な教科 道徳」講座の中で、意見を言いやすい空間にするということが印象に残っている。黒板の前にずっと先生がいると話しづらい空間になってしまう。先生が生徒の横に立ち、生徒に問いかけ、話を聞くことにより発言しやすい空間になるということを学んだ。また、意見を言ってほしい生徒には先に声をかけることも大事になることも学んだ。先に言っておくことにより、その生徒も心の準備ができ、発表する生徒も見通しをもてると考える。

校種別の講座で学んだ、医療的ケアの必要な生徒と関わる上で、「待つ」ということが大事になるということ、演習を通してより実感した。重度重複障害のある生徒は、選択することや考えることに時間がかかることが多い。その際に生徒の反応が出るまで待つことにより、その生徒の気持ちを言語化できると考える。従って、生徒の反応をじっくり待つということも生徒と関わる上でも大切になると考える。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 何事も前向きにやってみるということ

以前までは自信のないことに対して、避けることが多かった。しかし、演習では、先生に「やってみる？」と聞かれたことは進んで挑戦することを心がけた。朝の会や終わりの会の指導、重度重複障害のある生徒の身体介助や給食介助をさせていただいた。実際にやって初めてわかることや感じることもあり、挑戦したことで多くの学びが得られた。また、「夢・未来」講座では、初めての人と話をする機会が多く、グループワークの際積極的に話をしたり、挙手をしてみんなの前で発表したりすることも頑張った。そのような経験から、失敗を恐れずに挑戦する意識が高まったと考える。また、やってみることから学ぶことも多く、挑戦してみるという選択をできたことは成長につながったと思う。

(2) 学び続けるということ

生徒に関わる情報の中で、これまで知らなかった障害名や病名を知り、生徒のことを理解するために障害や病気のことについて学ぶ機会をもつことができた。また、生徒の関わりや支援方法に正解はなく、いろいろな方法を試行錯誤する中で最適な方法を見つけていくことを学んだ。一人一人の生徒のことを理解し、指導支援する中で学び続けていく必要性を実感することができた。「夢・未来」講座では、知らなかったこともたくさんあり、学ぶことばかりだった。今後はICTの効率的な活用方法なども学び、知識を増やしていきたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、生徒や先生方と関わり、より一層、京都府の教員になりたい気持ちが高まった。実際に生徒と関わる中で、生徒を理解して、その生徒の力を出せるような支援方法を考えて実践していきたいと考えるようになった。また、指導者がチームとして生徒の情報を共有し支援方法を考えるためにたくさん話し合うことで、一人一人の良さを伸ばすことができると学んだので、多くの先生とコミュニケーションをとりチームとして一緒に指導できるような教員を目指したい。

(2) 今後の課題

授業の中で生徒のことをよく見て、具体的にほめることが課題である。ほめる言葉のレパートリーが少なかったため、どのように言うかと伝わりやすいかを考える場面がたくさんあった。生徒が「先生は見てくれている」と感じ、意欲を高められる褒め方ができるようになりたいと考える。また、答えやすい質問や言葉かけをすることも意識したい。生徒にとって分かりやすい言葉を選んで説明したり答えやすい言葉を選んで提示したりすることで、生徒が学習内容を理解し主体的に学習を進めることができるようにしたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「集団の中で個性を発揮しつつ、人と協力して生きる力を育む支援」**

受講生氏名：廣田 湖都

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

時代の流れに沿って教育の形が変化する中、文化の違いや障害による特性などから、集団の中でみんなが同じ授業を受けるという教育の形では、十分な教育を受けられない子どもたちが増加してきている。このことから、子どもたちひとりひとりのニーズに合わせてありのままの姿や個性を伸ばし、そこから集団生活につなげる力を育む教育が必要であり、そのためには、具体的にどのようにしていくべきなのかを考えるため、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 先生方の子どもたちへの接し方や、意識されていることから見える子どもたちの様子を観察し、工夫されていることについて学ぶ。

イ 「体験授業」「研究授業」を通して、教材研究を深め、指導教員の方や担任の先生に授業実践に対するアドバイスをいただき、よりよい授業づくりについて探求する。

ウ 子どもたちと積極的に関わり、障害による特性や強みを探りながら、それぞれの実態に合わせた授業を計画・実行し、個性を発揮できる授業づくりについて考える。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は、中学部2年生3名を対象に、「バンドを組もう」という単元の授業を行った。バンドを通して音楽の楽しさに触れるだけではなく、楽器や曲をきめる過程で、自分の意見を発言することや協力することなどを目標として取り組んだ。

後期は、中学部2年生6名を対象に、「マスクケースを作ろう」という単元の授業を行った。様々な道具を使って正確に作成すること、好きなものを選んで装飾すること、考えを文字に現すことを目標にして取り組んだ。

(2) 演習校で学んだこと

授業実践をする中で、指導者の準備次第で生徒が見せる姿が大きく変わり、その生徒の姿から授業改善をすることで指導者も大きく成長でき、またそれを指導に活かすことで生徒の成長にもつながると感じた。教育は、生徒と指導者との間でやり取りをすることで成り立つものであり、指導者が一方的になれば成立しないことに改めて気づくことができた。

また、授業を準備する中で、担任の先生方がたくさん助けてくださった。その中で、担任の先生方との関係を築くことができ、それが授業内での連携につながるということが分かった。些細なことでも共有し合い、日々コミュニケーションをとること、お互いを信頼し頼ることがよりよい連携につながっていくと感じた。

この他に、学びに対する意欲的な姿を引き出すためには、日々の学級経営や環境が大きくかわってくることも学んだ。楽しむ時は生徒と一緒に楽しみ、指導する時は中途半端にせずきちんと指導する、時には生徒の様子やペースを確認し生徒を尊重して関わっていく。このような指導者と生徒の関係から学級経営が成り立ち、よりよい授業づくりにつながるのだと感じた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を通して学んだことは、京都府の教員に求められる資質・能力や、京都府が掲げる教育観についてである。京都府の教員を目指すうえで、京都府がどのような教育を目指しどのような教員を求めているのかについて詳しく学ぶことができた。

「夢・未来」講座を通して印象に残っているのは、第10回目の「学習指導要領に対応した学習評価」という講義である。評価に対して、記録に残すものであるというイメージが強かったが、この講義を通して、評価というものは指導と一体化して存在するもので、評価から指導に活かしたり、評価するための指導を用意したりすることであると学ぶことができた。また、ゴールにある子どもの姿を明確にし、そこからそのゴールのための目的を見つけていくことが、評価のための指導につながるということも学んだ。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業実践力

教師力養成講座の演習を通して、「体験授業」「研究授業」をさせていただく中で、生徒がより分かりやすいような情報の精選、よりよい授業の仕方を身に着けることができたと感じる。

情報量が増えることによる生徒への負担や、話し方伝え方発問の仕方による生徒の姿の違いを実践から学ぶことができた。説明は端的に伝えることをあらかじめまとめておくことで生徒の理解を促しやすく、授業の目的を明確に持つことでぶれない授業ができることを学んだ。

(2) 児童生徒理解

児童生徒を理解しようとする際に、より共感的に理解しようとする態度をもつことができるようになったと感じる。

障害による特性から、気になる行動や理解することが難しいことがあると、「やめさせるためには」「変えるためには」と考えがちであったが、そうでなく、その行動に対して共感的に理解しようとし、「なぜそうするのか」「どのようなときにそうなるのか」などのように生徒を理解していく必要があることを学んだ。生徒と関係を築く際にも、生徒のことをできるだけ尊重し、時には待つことも必要であると学んだ。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教師という職により魅力を感じ、早く教師になって生徒と共に過ごしたいという気持ちがより強くなった。演習を通してたくさん指導して下さった指導教員の方や、担任の先生方、また、一緒に過ごした生徒たちのためにも、教員になってたくさんの経験を積み、集団の中で個性を発揮しつつ人と協力できる授業づくりをしたいと考える。

(2) 今後の課題

障害のある生徒と関わる中で、指導者の準備や引き出し次第で、生徒から引き出せる姿も変わってくると強く感じたため、今後もボランティアを通してたくさん子どもたちと関わり経験や引き出しを増やしていきたい。

また、教師力養成講座を通して関わって下さった教員の方との縁を大切にしながら、実践に対するアドバイスなどをもらうなどして力を高めていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童生徒一人一人が主体的に取り組むことができる授業づくりと
支援のあり方」**

受講生氏名：岡田 紗香

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定の理由

様々な実態の子ども達がいる中で、教員は全体に対して授業をしなければならない。これまでの学校ボランティアでは、児童の個性や強みを活かしながら授業が展開され、一人一人が主体的に取り組む姿を見てきた。主体的に取り組むことができる授業づくりと支援の大切さを改めて感じた一方で、実際に中心指導者として授業を経験したことがないため、その難しさについて身をもって学ぶことができなかった。そのため、この教育実践演習では、一人一人が主体的に取り組むことができる授業づくりをどのように作っているのかについて実践しながら研究したいと考えた。また、長期間の関わりを経験する中で、児童の実態を把握しながら、それに応じた教員の対応や支援のあり方を学びたいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 子ども達と積極的に関わり、実態について考察する
- イ 授業参観において、先生方の授業内における工夫を学ぶ
- ウ 児童の主体性を引き出すことができる授業の実施

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は小学部2年生、後期は小学部6年生の学級で演習を行った。様々な特性や個性をもった児童に対して、担任の先生方がどのように関わられているか、授業ではどのようなことを大切にしながら進められているかを観察した。そして、「この児童はどのようなことが得意であるか」「どのような支援が必要であるか」など、自分なりの視点を持って授業を観察した。体験授業、研究授業では、子ども達の力や個性に合わせながら、選択をしやすいように選択肢カードや、意志を表示しやすいような振り返りシートを作成し、クラス内の児童全員が主体的に取り組めるような工夫をして授業実践を行った。

(2) 演習校で学んだこと

演習全体を通して、学んだこと、感じたことは2つある。

1つ目は、教員はパフォーマーであるということだ。より良い授業を考えて指導したり、視覚支援を行ったりすることはもちろん重要であるが、それだけでなく、子ども達の注目を集めて提示し、興味をもって活動への意欲が高まるように進めることが中心指導者には求められる。先生方はそのための方法をそれぞれで持っておられ、授業を参観する中で、学んだテクニックを自分の実践に活かしていくことができた。

2つ目は、子ども達の成長の姿が、教員という職業の魅力であるということだ。授業を進めていく中で、一つ一つの活動、一つ一つの場面において、子ども達は多くを学び、たくさんのことを感じていると実感した。

学級全体や児童一人一人の実態を細かく把握し、子ども達の「できた」を引き出す授業づくりが重要であると学んだ。授業づくりの難しさを感じると共に、他の先生方と話し合うことで多くを得られるということや、児童の生き生きした表情を見た時の嬉しさ、喜びを実感することができた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、現職の先生方や管理職の先生、教育委員会や文部科学省での勤務経験がある講師の先生方といった、様々な立場の方からお話を伺った。現場の状況だけでなく、子ども達が今直面している課題や、京都府で教員になる上で、求められている資質・能力、これから培っていかねばならない能力など、幅広い学びを得ることができた。

その中でも一番印象に残っているのは、「特別の教科 道徳」の講義である。児童生徒の数が限られた教室では、日々過ごしている生活が道徳教育にあたるのではないかと感じた。演習の中でも、相手の気持ちを読み取ることが苦手な子どもが、クラスの友達に対しては、自分の気持ちにどこかで折り合いをつけて一緒に過ごしている姿が見られた。また、子どもたち自身で考え、失敗をしながら学ぶ場面も見られ、日常生活の中で道徳を学び、日々成長し続けているのだと改めて実感した。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 教員としての自覚や責任感

長期間の演習を通して、子ども達と直接関わる中で、教員になる自覚と責任をこれまでに以上と感じることができた。学生であっても「先生」と呼ばれる以上、行動や発言に注意を払いながら接する意識をもつことができた。また、授業についても、たくさんの先生方とお話しさせて頂き、自分なりの指導方法を見つけるために試行錯誤を重ねた。授業を模索する中で、より具体的に、より児童のことを考えながら授業づくりを進めていくことができた。常に子ども達のことを考えている時間が、教員という仕事の魅力であると感じ、教員になるという自覚や責任感を持つことができた。

(2) 観察力や気づく力

演習日は、できるだけ児童の変化や成長に気づけるよう、児童の様子を細かく観察することを心がけた。活動に取り組む姿や友達関係にも目を向け、頑張った姿だけでなく失敗してしまった姿があっても、積極的に言葉を掛け、褒めることを意識した。多くの言葉をかけていくことで、児童は「見てくれている」という気持ちを持ち、その後児童から関わりを求めてくるなど、信頼関係を結ぶきっかけにもなった。また授業参観では、たくさんの指導方法の工夫に気づくことができるようになった。演習前期では気づけなかった視覚支援の提示の仕方やテクニックなど、後期には多くの工夫に気づくことができるようになった。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座の演習を通して、教員の多忙さや責任を実感した。しかし、先生方一人一人が、子どものことを第一に考え指導されている姿や、授業での子ども達の成長など多くの面で感動し、教員という仕事の魅力をより一層感じることができた。今後も、子どものことを一番に考え、常に児童と共に成長し続ける教員になりたいと強く思う。

(2) 今後の課題

多くの課題がある中で、特に授業準備に力を注ぎたいと考える。授業を考え、どれだけ一人一人に合わせた手立てを悩んだとしても、具体的な授業の進め方や話し方、使う言葉などを厳選しておくことの必要性を強く感じた。また、子どもの発言や考えを予測し、言動に対してどのように対応するかも具体的に想定できるようになりたい。そのためには、計画的に授業を考えるだけでなく、先生方と話し合うことで子どもの姿を多面的に捉えながら、より具体的な手立てを考えて授業づくりをしていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「個々の個性を生かした「生きる力」を育む授業づくり」**

受講生氏名：平井 泉

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

新学習指導要領では「生きる力」を育むことが求められている。「生きる力」とは、学校で学んだことや身に付けた力が学校生活のみに留まらず、社会で生きていくときにも役立つ力だと考える。障害の有無に関わらず、全ての子どもに個性やできることがあり、それを活かした「生きる力」を育む授業をしたいと考えた。また、子どもたちが「自分にもできることがある」という自信を持つことができれば、自己肯定感を高めることにもつながると考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

まず、児童の長所やできることは何か、という視点を持ち、それぞれにどのような個性があるかを考えながら児童生徒理解に努める。また、先生方に児童の実態や、課題を設定した理由、それぞれの授業を通して目指す姿について質問する。以上を通して個性を生かす手立てにはどのようなものがあるかについて知り、自己の実践の中で生かしていく。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前半は小学部4年生の学級で、「遊びの指導」の体験授業及び研究授業を行った。授業では、数の理解を深めつつ、学級全員で遊ぶことを目指し、双六を行った。友達と活動する意識がもちにくい児童が好きな「数」を題材にすることで、全員で一緒に活動し子ども同士がやり取りをする場面を作ることができた。ルールを説明するときには実演があれば指示を理解できるという実態に応じ、良い例と悪い例の見本を示した。そうすることで児童が理解し自ら活動に向かうことができ、褒められる場面も増え、自信をもつことにも繋がった。

後半は小学部2・3年生の重度重複障害のある児童が在籍する学級で、「遊びの指導」の体験授業を行い、「ぬたくり」で制作活動に取り組んだ。絵の具の感触を楽しむことができる実態から自由に手で絵の具を触ったり、画用紙に着色したりしながら「母の日のプレゼント」を作った。持っている力を存分に生かして活動する経験を重ねることができた。

(2) 演習校で学んだこと

学んだことは2点ある。1点目は、学校で行う全ての活動一つ一つが「生きる力」を育むことに繋がっていることだ。例えば、着替えや食事、トイレ、字を読むこと、ルールを守ること、あいさつ、自分の気持ちを伝えることや人と関わることなどだ。また、見通しを持てば落ち着いて活動できる子どもに対して、初めての人と出会う前には顔写真を提示しておくといったように、子どもが得意なことや個性を生かせるように、個々に応じた手立てを考えて支援を行うことで、「生きる力」につなげていけるということを学んだ。

2点目は言葉掛けの大切さだ。子どもたちの障害の程度によって、言葉掛けに対する反応は様々だ。しかし、どの子どもたちも教員が自分にどのような言葉掛けをしているのかをよく見ていた。そのため、言葉掛けは行動を正確に意味づけた上で、その子どもに分かる言葉を使って丁寧に伝えていくことが大切であり、またその積み重ねが信頼関係を築くことに繋がっていることも学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

学んだことは2点ある。1点目は、京都府が目指す教育の在り方について学んだ。今まで、「包み込まれているという感覚」を養うことを重視してきたが、それを基盤に「新しい価値を生み出す」人間像を目指すことを理解することができた。講座のテーマは「人権教育」や「学習評価」、「特別支援教育」など様々であったが、どのテーマを学ぶときも、京都府の教育理念と結び付けて考えることができた。

2点目は、人とつながることの大切さを学んだ。開講式での「出会いを大切にしてください。」という言葉が印象に残っている。そのため、演習で出会う先生方や子どもたち、また講座でディスカッションをした受講生と関わる際にもこのことを心に留めながら活動した。これにより、学びを充実させることができ、京都府の教員に求められる「つながる力」を養うことができたと考える。今後は「つながる力」を基盤に他の4つの力も伸ばしていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 「夢・未来」講座での学びと演習での実践の一体化

「夢・未来」講座では学んだことを知識として蓄えられた。また、講座の内容と演習で経験したものと照らし合わせ、具体的なイメージを持ち、学びと実践を一体化させる力が身についた。講座を聞くだけで終わるのではなく、演習に生かすこと、また演習で経験したことに意味付けすることで、学びを深めることができた。

(2) 一人ひとりに適した関わりをすること

積極的に子どもと関わって関係を深め、適した言葉掛けや支援を模索し、実践に移すことができた。演習では初めてのことが多く、児童の対応に困る場面も多くあった。また教材研究において、どうすればより実態に即した授業ができるか悩むこともあった。また、全員に当てはまる支援方法はなく、必要な支援は一人ひとり異なる。支援を考える上で、先生方の言葉掛けの仕方を分析したり、アドバイスを頂いたりしたことを基に試行錯誤しながら実践に生かしていくことができた。児童生徒の行動を見取り、意味付けしながら適した関わりや支援を考えていく必要性を改めて感じる事ができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教員間の連携を密にして、チームティーチングを生かした授業ができる教員になりたい。チームとして複数の教員で児童生徒を指導しているからこそ、授業づくりが豊かになり、個性を生かした授業づくりを行えると考える。そのために心掛けたいことは2点ある。1点目は、自分一人の考えだけではなく、いろいろな先生の意見を取り入れて考えることだ。2点目は、授業では連携を密にしてスムーズに授業を進められるよう、事前の打ち合わせを十分にしたり、子どもの姿に応じて臨機応変に対応したりできるようになりたい。そして、これらを通して、児童生徒の個々の個性を引き出せる教員になりたいと考える。

(2) 今後の課題

授業の準備を万全にして臨むことだ。そのために実践したいことは2点ある、1点目は、授業のイメージを膨らませ、あらゆる場면을想像し、必要なものを揃えることだ。2点目は、他の先生方と相談して準備に不備がないか確認することを行いたい。これらを心掛けて事前準備を充実させていれば、授業が滞りなく進められるだけでなく、児童生徒一人ひとりと丁寧に取り組むことや、反応や言動に注目する余裕ができる。また、次の授業に向けて改善点を考えることにもつながると考える。これらの2点を心掛けて授業を行い、子どもたちのできることを増やせるように努力したい。

第16期「教師力養成講座」を終えて 「子どもの主体性を引き出す工夫」

受講生氏名：辻村 日和

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私がこの演習テーマを設定した理由は、児童生徒が「楽しい」「もっとしたい」と主体的に活動に取り組める授業を行いたいと考えたからである。児童生徒ひとりひとり興味・関心や感じ方も異なるが、どのような工夫を行えば様々な活動に挑戦しようとする児童生徒の主体性を引き出せるのか学びたいため、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 先生方が授業の際に、児童生徒とどのような関わり方をしているのか見て学ぶ。
- イ 日常生活の関わりをとおして児童生徒のできること、分かり方、興味・関心のある事柄などを把握し、児童生徒理解を深めると共に、先生方にも尋ねてさらに理解を深める。
- ウ 授業実践後に振り返りを行い、先生方からアドバイスをいただいて次の授業実践までに、指導方法、教材等の準備物、個々の支援の工夫などを考える。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容及び学んだこと

前期は、中学部2学年の生活単元学習の授業を行った。この授業は、コロナ禍で他学年との交流学习の機会が少なかった生徒達が「卒業生を送る会」という行事に向けて、3年生を意識して、3年生のために様々な活動に取り組むことを目標とする授業だった。発表場面で必要な装飾品の制作では、「何を作れば3年生が喜んでくれるのか」生徒とやり取りをしたうえで決定し、「ミッション」形式で制作時に必要な材料を集める活動を行った。「ミッション」では生徒の興味・関心が高く、これまでの授業で経験したことのあるICTを用いることで活動への意欲を高め、生徒が自分から活動に取り組む姿を引き出すことができた。活動順は、イラストと顔写真を用いた視覚支援を準備することで、何をどの順番でするか分かって、主体的に活動に取り組むことができていた。授業を繰り返す度に、主体性を引き出すには、適切な視覚支援を準備することが大切だと気付いた。

後期は、小学部の肢体不自由児クラスの遊びの指導で「おはなしあそび」の授業を行った。繰り返しのセリフがあり次の展開に期待感を持ちやすい絵本を選び、児童個々とやりとりができる授業を行った。絵本の読み聞かせでは、興味を持ちやすいように抑揚をつけて読み、やりとりの場面では具体物を用いた。児童自身が身体に意識を向けられるように、身体を動かすやりとり遊びをとおして、児童の身体の状態を把握したうえで、できる動きを見つけ授業に取り入れていくことの大切さを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

演習をとおして児童生徒の「わかり方を理解すること」「できること、苦手なことを丁寧に把握すること」の必要性を学んだ。子どもひとりひとりの実態を教員が把握していないと、子どもが力を発揮しにくい授業となってしまう。しかし児童生徒ひとりひとりの実態把握を丁寧にしておく、学習場面で子どもが「わかる、できる活動」を準備しておくことができ、「できた」活動を積み重ねることで期待感を高めて安心して授業に参加でき、それが主体性を引き出し、積極的に活動に向かう姿勢を引き出すことができると気付いた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では児童生徒理解の必要性、教育現場に必要な知識、児童生徒との関わり方を学んだ。

第4回の教育実践講座Ⅰの「特別支援学校における児童生徒理解」の講義が特に印象的であり、特別支援学校の教員になるにあたって意識していきたい内容を学ぶことができた。講義では児童生徒を理解するのは「気付き」から始まるということを学んだ。児童生徒の学習場面や行動を観察し、課題に「気付く」ことが児童生徒の支援方法や目標を立てることに繋がる。今後も教育現場で児童生徒と関わる際には、児童生徒の日々の姿をたくさん関わりながらよく見て、知ることによって児童生徒理解が深まるように努めていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童生徒との関わり方・対応力

児童生徒は障害の特性や状態、わかり方等ひとりひとり異なっている。そのため関わり方や対応方法もひとりひとり異なっている。同じ授業、活動に取り組むにあたって、個に合わせた準備物や視覚支援などの工夫を行い、児童生徒の「できること」を把握したうえで授業実践をすることの大切さを学んだ。演習中に子どもそれぞれのわかり方に気付くためには、日常的に児童生徒とコミュニケーションをとることが大切だった。ひとりひとりにあった言葉を選んで、言葉掛けをすることで、やりとりが成り立つと実感することができた。

(2) 教材研究の大切さ

授業実践をするにあたって、児童生徒がどのような工夫を用いると楽しく取り組めるのか、主体性を引き出すことができるのか、どのような教材を使用することでねらいを達成できるのかなどたくさん悩んだ。インターネットで情報を集めたり、実際にお店に行き授業で使えるものはないか探してみたり、授業で取り組む前に自分で実際に制作してみるなど、授業を実践するにあたっての教材研究の大切さと大変さを学ぶことができた。例えば制作活動において、この子は道具の操作に難しさがあるため事前に必要な支援、工夫を準備しておく、この子には見通しが持てるツールを作成しておく等、活動の展開場面ひとつひとつで児童生徒の姿を想定しながら様々な教材を準備した。授業実践の際、このような教材研究が役に立ち、児童生徒も活発に授業に取り組むことができたので、教材研究の重要性を実感することができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座をとおして、児童生徒と関わることの楽しさをより感じることができ、教員になりたいという気持ちが強くなった。児童生徒から学ぶことが非常に多くあり、実際に教員になった際も学び続けることの大切さを意識していきたい。児童生徒と共に、日々学び続け成長できる教員になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題として、児童生徒ひとりひとりに適したねらいや目標を立てられるように、児童生徒の「できること、難しいこと」を明確に分かるように関わっていきたい。また児童生徒のできることが広がるような教材を考えることが今の私の課題であると考えている。そのため、たくさんの先生方の授業を見学し、自分の中の引き出しを増やしていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童生徒理解を基盤とした授業づくり」**

受講生氏名：岡本 眞里奈

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

授業づくりにおいては、児童生徒理解が基盤になると考える。様々な特性を持つ児童生徒をどのようにして理解して、どのように指導目標をたて、どのような学習内容を考え、どうやって評価するのか、教育現場での演習をとおして学びたい。様々な場面で実際に関わりながら児童生徒理解を深め、個に合わせたコミュニケーション方法や適切な支援のあり方を身に付けたいと考え、この演習テーマを選んだ。

(2) 研究方法

ア 先生方と児童生徒のコミュニケーション場면을観察する。

イ 実際に児童生徒に関わる。

ウ 先生方から児童生徒の情報を聞く。

エ 連絡帳から児童生徒の家庭での様子を知る。

オ 個別の指導計画や教育支援計画、発達検査記録等から児童生徒の基本的な情報を把握する。

カ 研究授業を行い、個に合わせた支援や手立てについて考える。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は、小学部高学年の学級で日常生活の指導や遊びの指導の体験授業や研究授業を行った。日常生活の指導は、毎朝実施する「からだづくり」の中心指導を行った。活動に取り組む中で、児童の様子を見て、少し難しい内容を取り入れたり、児童によってお手本の示し方を変えたりする等の工夫を行った。遊びの指導では「鬼ごっこ」に取り組んだ。説明場面では視覚支援を用いて短く簡潔に伝えることや、自分自身が本気で鬼から逃げたりかくれたりして児童達の気持ちを高めたり、個々のねらいに沿った言葉掛けを意識して実践した。

後期は、中学部3年生の学級で特別活動の体験授業を行った。その授業では、「教えて！みんなのこと」というテーマで、生徒や教師についての情報を生徒から教えてもらう活動を行った。学習活動はクイズ、写真を集めるミッション、集めた写真から該当者を当てるクイズ、という流れで実施した。生徒達個々に異なる、聞いて理解する力、読んで理解する力に合わせて、漢字、仮名、イラスト、写真を用いた教材を準備した。

(2) 演習校で学んだこと

演習をとおして、児童生徒の行動の背景を知る必要があることを学んだ。授業中に走って教室を出たり、最後まで活動に向かえなかったり、突然友だちに手がでる等の場面で、今まで私は「なんでこんなことをするのか」と困った気持ちになっていた。しかし、本当に困っているのは児童生徒だということに気づいた。このような行動の背景には、「何をするのか分からない」「自分にはできない」といった活動に対する不安な気持ちや、特性等々様々な要因があると学んだ。児童生徒が安心して学校生活を送り、学習活動で力を発揮できるようにするために、児童生徒の興味関心、得意なこと、苦手なこと、支援があればできること等々を丁寧に知っていく「実態把握」がとても大切であり、実態把握が適切にできていれば、児童生徒に合った支援・手立て、授業づくりが実現することを学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

教師の心構えとして大切にしたいことを二つ学んだ。

一つ目は、「気づく力」だ。これは、京都府が大切にしている5つの力の内の1つである。この「気づく力」があるからこそ、児童生徒の可能性を「伸ばす力」に繋がっていると学んだ。児童生徒の些細な変化に気づくためにも、児童生徒と日々関わり、児童生徒理解に努めたい。

二つ目は、一人一人の違いを認めることだ。それは、能力や性格、見た目、夢、目標等、すべてに当てはまると考える。私は特に、「ずっと同じ道でなくてもいい。先を見据えて色んな選択をして大丈夫。」という言葉が印象に残っている。周りと同じでないことが、恥ずかしいことではないと希望をくれた言葉だった。自分のやりたいことや、夢を応援して背中を押してあげられる教師でありたいと思った。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座で身に付けた力は、児童生徒に分かりやすく伝える力だ。例えば、児童生徒が席から離れたときに、言葉だけで促すのではなく、座る席を視覚的に示すことで、伝わりやすくなることに気づいた。また児童生徒に質問する際に「どうだった？」等、抽象的に聞くのではなく、選択肢を提示したり、具体物や写真を用いたりして、児童生徒が「今何を聞かれて」「何を答えるのか」分かるように質問する力を身に付けた。このように教師力養成講座をとおして、児童生徒理解が深まり、伝え方が変わった。

次に、授業を行ったことで成長した点は、授業中の児童生徒とのやりとりだ。研究授業では、質問に対して積極的に発言する児童とばかりやりとりを広げた。自ら発言することが難しい児童の中には問かけると発言できる児童もいたが、特定の児童とのやりとりから全体に広げるには至らなかった。そこで次に行った体験授業では、全員とやりとりをすることを意識した。すると全員とやり取りができ、児童生徒が発言する機会を均等に作ることができた。これからも授業の中で、児童生徒ひとりひとりとコミュニケーションをとることを大切にしていきたい。

また教材づくりの大切な視点も学び、自分の成長に繋がった。その視点は2つある。1つ目は、児童生徒の経験が広がりことばの育ちにもつながるような魅力的な物を教材として準備することの大切さだ。2つ目は、児童生徒個々の力に合わせた教材を準備することの大切さだ。教材を児童生徒が実際に使う場面を想定し、使用してみて改善を重ねる等の教材研究も大切だと分かった。これらの視点を大事にして今後も教材づくりに臨みたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は、児童生徒の可能性を引き出すことができる教師になりたい。児童生徒の持つ力は教師の指導の工夫によってより発揮され伸ばせることを、教師力養成講座をとおして学ぶことができた。実践したいことが2つある。1つ目は、児童生徒の良いところを活かして「できる」経験を増やすことだ。児童生徒の「できる」を見つけるためには、実態把握が必要である。日々の児童生徒との関わりを大切にしていきたい。2つ目は、児童生徒の頑張った部分や頑張ろうとしている姿を認めて褒めることだ。「自己肯定感」を育みながら、児童生徒の可能性を引き出すことができる教師になりたい。

(2) 今後の課題

私の今後の課題は、「段取りの力」を上げることだ。今回は授業づくりだけに集中して準備を行うことができたが、教師になると、授業づくりだけではなく様々な業務を平行してすすめるなければならない。優先順位を考えながら仕事に取り組めるようにしていきたい。